

ユベール・スダーン モーツァルトの旅 第6回

PROGRAM

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart

交響曲 第35番 二長調 K.385 「ハフナー」(約20分)

Symphony No. 35 in D major, K. 385, "Haffner"

- | | |
|--|------------------------------|
| 第1楽章 アレグロ・コン・スピリート
<i>Allegro con spirito</i> | 第2楽章 アンダンテ
<i>Andante</i> |
| 第3楽章 メヌエット
<i>Menuetto</i> | 第4楽章 プレスト
<i>Presto</i> |

ピアノ協奏曲 第20番 二短調 K.466 (約30分) ★

Piano Concerto No.20 in D minor, K. 466

- | | |
|---|-----------------------------|
| 第1楽章 アレグロ
<i>Allegro</i> | 第2楽章 ロマンس
<i>Romance</i> |
| 第3楽章 ロンド:アレグロ・アッサイ
<i>Rondo: Allegro assai</i> | |

— 休憩 (20分) — Intermission

交響曲 第40番 二短調 K.550 (約30分)

Symphony No.40 in G minor, K.550

- | | |
|--|--|
| 第1楽章 モルト・アレグロ
<i>Molto allegro</i> | 第2楽章 アンダンテ
<i>Andante</i> |
| 第3楽章 メヌエット:アレグレット
<i>Menuetto: Allegretto</i> | 第4楽章 アレグロ・アッサイ
<i>Allegro assai</i> |


指揮:ユベール・スダーン *Hubert Soudant, Conductor*ピアノ:津田 裕也 *Yuya Tsuda, Piano* (★演奏曲)


2017 4/15(土) 3:00PM開演

兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

助成:  文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)

 公益財団法人
アフィニス文化財団

これさえ
見れば
わかる!

今回の聴きどころ

飯尾 洋一 (音楽ライター)

ウィーンで絶頂期を迎えたモーツァルト

本日演奏されるのは、モーツァルトがウィーン時代に書いた交響曲と協奏曲の傑作。故郷ザルツブルクで宮廷音楽家を務めながら、よりよいポストを求めてヨーロッパ各地を旅したモーツァルトだが、就職活動は失敗に終わり、フリーの音楽家としてウィーンに移り住む。この地でモーツァルトは時代の寵児となって大きな成功を収めた。当時、モーツァルトは20代後半の若者。祝祭的な交響曲第35番「ハフナー」や、ドラマティックなピアノ協奏曲第20番は、そんな充実した日々から生まれてきた作品である。

モーツァルトにとって、成功は「終わりののはじまり」でもあった。35歳で早世する天才に残された時間はわずか。最後の交響曲群となる、交響曲第39番から第41番「ジュピター」までの「三大交響曲」を書いたのは32歳のこと。ト短調で書かれた交響曲第40番には、どこか達観したような哀感が漂う。

3曲それぞれがウィーンで過ごしたモーツァルトの濃密な日々を伝える。



ライターおすすめ

必聴POINT

モーツァルト:交響曲 第35番 二長調 K.385 「ハフナー」

旧友の爵位授与を機に書かれた祝祭の音楽

故郷の旧友が爵位を授かる式典のために書かれたというだけあって、明るくエネルギーあふれる曲想が特徴。いわば音楽で綴った「お祝いのメッセージ」。

モーツァルト:ピアノ協奏曲 第20番 二短調 K.466

ベートーヴェンも愛好した情熱的な音のドラマ

ピアノとオーケストラがともに音楽を作るのが協奏曲。しかし楽章の終盤にはカデンツァとして、ピアノ・ソロだけのための聴かせどころが用意される。ソリストの魅力が全開に。

モーツァルト:交響曲 第40番 二短調 K.550

だれのための曲なのか。謎多き三大交響曲の一曲

全編にわたって美しい瞬間が次々とやってくる名曲だが、なかでも第2楽章は格別。ゆったりとした優美な楽想は定石通りだが、それでいてどこか不安にさせるような儚さも。

ユベール・スダーン モーツァルトの旅 第6回

PROGRAM NOTE



[曲目解説]演奏をより深く楽しむために—— 飯尾 洋一(音楽ライター)

モーツァルト:交響曲 第35番 二長調 K.385 「ハフナー」

初稿は不明。最終稿の初演は1783年3月23日 ウィーン

旧友の爵位授与を機に書かれた祝祭の音楽

故郷ザルツブルクの宮廷楽団を辞め、ウィーンへと移り住んだヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)。ウィーンに住んで2年目となる1782年、故郷の父レオポルトを通じて新たな仕事の依頼が舞い込む。ザルツブルクの名門ハフナー家の若い当主ジークムントが爵位を授かるので、その祝典用の音楽を書いてほしいというのだ。ジークムントとは幼なじみの間柄であったモーツァルトは、この仕事を引き受ける。

しかしこの時期、ウィーンでのモーツァルトはすでに多忙の身であった。ザルツブルク時代のような「定職」にはついていないものの、多数の仕事を抱え、おまけに自身の結婚も間近に控えていた。筆はなかなか進まず、父レオポルトに対してたびたび言いわけの手紙を送っている。

まずは第1楽章のみを送り、「最初のアレグロしか入っていないのでびっくりしたでしょう。でもどうしようもなかったのです。大急ぎでほかにセレナードを1曲書かなければならなかったのです」と釈明し、続く便では「ぼくの誠意はわかってください。できないものはできないのです。やつつけ仕事はしたくありません。終楽章は送りましたが、次の便まで、全曲をお送りすることはできません」と綴っている。モーツァルトといえば速筆のイメージがあるが、締め切りに追われる様子が伝わってきて興味深い。



[作曲家プロフィール]

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756 - 1791)

Wolfgang Amadeus Mozart

結局、作品の完成が祝宴に間に合ったかどうかは不明である。しかし、作品の出来栄には満足がいていたのであろう。その後、モーツァルトはウィーンでの演奏会のために、この曲を再利用している。その際、モーツァルトはスコアにフルート2本とクラリネット2本を書き足して、木管楽器の編成に厚みを加えている。

第1楽章 アレグロ・コン・スピリート
2オクターヴにわたってヴァイオリンが跳躍し、勢いよく開始される。

第2楽章 アンダンテ
優美で気品に満ちた緩徐楽章。

第3楽章 メヌエット
活発なメヌエットの間に、典雅なトリオがはさまれる。

第4楽章 プレスト
レオポルトへの手紙には「できるだけ速く演奏されなければなりません」と記される。喜びにあふれた快活なフィナーレ。

楽器編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

ピアノ協奏曲 第20番 二短調 K.466

初演:1785年2月11日 ウィーン

ベートーヴェンも愛好した情熱的な音のドラマ

作品の大半が長調で書かれるモーツァルトにあって、このピアノ協奏曲第20番二短調

ザルツブルクに生まれ、後半生をウィーンで過ごしたウィーン古典派を代表する作曲家。音楽家の父レオポルトにより幼少時から才能を見出され、神童として欧州にその名を知られることになった。10代より旺盛な創作活動を続け、オペラや協奏曲、交響曲、室内楽、宗教音楽など、あらゆるジャンルにわたって傑作を書き残している。ウィーンでは自らの独奏によるピアノ協奏曲や、「フィガロの結婚」をはじめとするオペラにより、一世を風靡した。

PROGRAM NOTE

は、続いて演奏される交響曲第40番ト短調と同様、数少ない短調の作品として異彩を放っている。激しく暗い情熱にあふれたドラマティックな楽想、感情表現の振幅の大きさは、ほかの協奏曲ではほとんど見られないもの。そのロマン主義的な性格ゆえか、この作品は作曲者の死後、19世紀においても広く愛好された。

また、ベートーヴェンはこの曲をレパートリーとして演奏し、自らカデンツァ(独奏者のみが演奏する即興的な部分)を書き残している。モーツァルト自身はカデンツァを残していないため、現在でもこのベートーヴェン作曲のカデンツァが演奏されることは非常に多い。

第1楽章 アレグロ

不穏なシンコペーションのリズムで開始され、管弦楽が悲劇的な気分を高める。対して、独奏ピアノはどこか寂寞とした様子で登場する。終結部の手前にカデンツァが置かれる。

第2楽章 ロマンズ

安らかで平穏な主題で開始される。中間部では激情がほとばしり、鮮やかなコントラストを描く。

第3楽章 ロンド：アレグロ・アッサイ

緊迫感のある力強い独奏主題で開始される。ここでも終結部の前にカデンツァが置かれる。最後は二長調に転じて、明るく晴れやかな気分で曲を閉じる。

楽器編成 独奏ピアノ、フルート、オーボエ2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

交響曲 第40番^{ト短調} K.550

初演：不明

だれのための曲なのか。謎多き三大交響曲の一曲

交響曲第40番は同第39番、第41番「ジュピター」とともにモーツァルトの三大交響曲に挙げられる。これらの傑作群は1788年の6月末から8月にかけて作曲された。当時モーツァルトは

32歳。一般的にはまだまだ若い年齢だが、35歳で世を去るモーツァルトにとってはすでに晩年に相当する。この後、モーツァルトは交響曲を書いていない。

傑作として名高い三大交響曲であるが、だれがなんのために作曲を依頼したのか、またいつどこで初演されたのか(あるいはされなかったのか)も、わかっていない。

かつては演奏されるあてもないままに、ただ純粹に芸術的欲求にしたがってこれらの作品が書かれたと考えられていたこともあったが、依頼を受けて作品を書くのが常であった作曲家が大規模な交響曲をなんの収入の見込みもなく書くとは考えづらい。この頃、モーツァルトはフリーメイソンの仲間であった織物商プフェルクへたびたび借金を申し込む手紙を書いており、暮らしぶりに余裕は感じられない。少なくとも交響曲第40番に関しては演奏用のパート譜が残されていることや、クラリネットを追加した第2稿が用意されていることから、生前になんらかの形で実際に演奏されたと考えられている。

なお、今回の演奏ではクラリネットのない初稿が使用される。

第1楽章 モルト・アレグロ

ため息のような冒頭主題で開始される。モーツァルトには珍しく短調で書かれた交響曲であり、哀感あふれる優美な楽想がくりひろげられる。

第2楽章 アンダンテ

清澄で穏やかな緩徐楽章。どこか底知れない静けさを湛える。

第3楽章 メヌエット：アレグレット

本来は優美な踊りの音楽であるはずのメヌエットだが、むしろ決然として強靱である。

第4楽章 アレグロ・アッサイ

急速に駆けあがるような主題ではじまり、情熱的で緊迫感あふれるフィナーレが築かれる。

楽器編成 フルート、オーボエ2、バスーン2、ホルン2、弦楽5部